

今年こそ平和な世界の実現を 有り得ない「戦艦」論議に呆れる

ジャーナリスト

三木寛郎

「戦艦」はどこにある

事の起りは2025年11月7日だった。衆院予算委員会において、立憲民主党の岡田克也氏が台湾をめぐってどのような状況が、日本にとって「存立危機事態」にあたるのかと高市首相に質問した際に、高市氏は「戦艦を使って、武力の行使も伴うものであれば、これはどう考えても存立危機事態になりうるケースだ」と答弁したのだから、これが中国の逆鱗に触れ、駐大阪総領事の薛劍氏はX上で、この答弁を引用し、「勝手に突っ込んできたその汚い首は一瞬の躊躇もなく斬ってやるしかない」とコメントを書き加えたのだ。

それ以降は日本政府も中国政府も蜂の巣をつついたような大騒動となり、日本への中国人旅行者の渡航が抑制されたり、日本の海産物が中国に輸出できなくなったり、挙句の果てにはバンダが日本から消えるような様相を呈してきている。

そもそも「存立危機事態」とは、2015年に成立した安全保障関連法に記載されている法的用語であり、同盟国に対する武力攻撃が日本の存立を脅かす事態を指すという。そしてそうした状況では、脅威に対応するために自衛隊が出動できるとされているのであるが、当方としてはそんなことは願い下げだし、日本、中国双方もそんな事態は望んでいない筈であるし、そうであってほしいと願う。

根本的な意味において、中国は台湾について、いずれは中国本土と統一すべき失われた領土とみなしているのだ、台湾防衛に関する外国政府当局者の発言は、全て内政干渉と見なす傾向が強い。米国や日本などが台湾支持を表明することは、台湾の「分離主義者」を勢いづかせると中国は捉えているのである。

だからこの範疇の話は基本的に「触らぬ神に祟りなし」とされてきたのであり、敢えてそこに特化した質問をした岡田氏も岡田氏だが、それを真つ向勝負で受けて立って「存立危機事態」の定義をした高市氏も高市氏だということができそうだ。

「存立危機事態」はさておき、高市氏の答弁で気になったのが、「戦艦」という単語である。

筆者の記憶が正しければ、いま世界の国々で「戦艦」を保有する海軍はない筈だからである。誰もが思い浮かべる戦艦大和は第2次世界大戦中の遺物であり、艦名をカタカナに変えて戦艦ヤマトとなってイスカントルに旅立つのはあくまでもSFの世界のお話である。現存する戦艦を調べてみると、著名なところで日露戦争時代の「戦艦三笠」、湾岸戦争時に最後の作戦を実行した「戦艦

ミズーリ」「戦艦テキサス」「戦艦アラバマ」など、10指に欠ける。そしてそのすべてが博物館となっており、現役ではない。序だが、現存する最古の戦艦はスウェーデンのストックホルムに展示されているヴァーサ号という木製のもので、どうやら基本的な設計ミスやら、あま



真珠湾に係留され博物館となっている戦艦ミズーリ

りに多くの大砲を積載したことによるバランスの悪さなど複合的な原因で、1658年の進水式当日に港から1300m離れたところで横風を受けて沈没してしまっただけという。もちろん、ヴァーサ号も博物館の中に展示されている。

戦艦とは、かつては国の威信をかけて建造された超大型の軍艦であり、とくに20世紀中期の第2次世界大戦頃までは、列強国がその軍事力の象徴的存在として建造した艦船であった。頑丈な作りで、巨大な大砲



戦艦大和

を積載し、不沈艦つまり沈まない船とまで言われた存在であったが、日米におけるミッドウェー海戦や、戦艦大和の最後にあるように、航空戦力の優位性が強まるにしたがって「無用の長物」的な存在になってきたことは否めず、もはや現役で配備されることはなくなったのである。例外として、ロシア海軍のキローフ級原子力ミサイル巡洋艦が英国で出版されている軍艦のみを扱う年鑑である「ジェーン海軍年鑑」において「巡洋戦艦」に類別されている。

市民の平和こそ最重要

つまり、高市氏の発言にある「戦艦を使って、武力の行使」をするところのできる軍隊は今や世界中のどこにもないということなのだ。

だとすれば有り得ない事態を想定して語った言葉を槍玉に挙げて、日本と中国という大国が重箱の隅を突いて大騒動を展開していることにならないだろうか。

そもそも有り得ない存在である「戦艦」を持ち出した方も持ち出した方だが、その言葉尻を捕まえて「その汚い首は一瞬の躊躇もなく斬って

やる」と発言する方も発言する方である。子供の喧嘩でもあるまいに、そんなことだから世界から紛争の火種が消えてくならないのだと言いたくもなる。

今回の件でも顕著だが、国を代表する指導者たちが始めた口喧嘩や罵りあいがある原因で紛争が起き、そんな発言やいざこざとは何の関係もない一般市民がその戦禍に巻き込まれるとしたら、こんな愚かなことはないだろう。

大国のリーダーや要人であればこそ、全く意見の違う論争があり、噛み合わせ議論があり、譲り難い齟齬があったとしても、お互いの相違点をまず認め、会談や会見が終わった後にこやかに和やかに会食するような態度が取れないものだろうかと思う。それができる人たちがだからこそリーダーであり要人であるのであって、一般市民が見ていてもハラハラさせられるような罵詈雑言の応酬は見苦しい限りである。

もちろん、一国の宰相がいったん口から出した言葉を易々と撤回するようなことはあつてはならないが、そこに含まれた「戦艦」という言葉

だけを引つ込め、有耶無耶とは言わないが上手な落としどころを探るような方法論はないものだろうか。

例えば、高市氏が「私は戦争が大嫌いなので、戦艦の定義を良く知りませんでした」というような平和を訴えつつ自分の発言を訂正するような発言をし、序に「汚い首でも斬られたくはないですからね」ぐらいの応対をして、薛劍駐大阪総領事と会食でもすれば形良く収まるのではないだろうか。いやそんな風に収めて欲しいと願う。

このような状況だからこそ、後世に残るひとつの実例として、日本、中国双方の智慧を出し合つて、この事態を丸く収めることができたなら、それに関与した人々は高く評価されることになると思う。

米国トランプ大統領の和平交渉も、そうした観点から知性ある方法論の策定を願うばかりである。

四半世紀を過ぎた21世紀の世に、新たな紛争の火種や戦禍に見回れる不幸な市民が生まれることがないように、さらに一刻も早くそうした悲劇に見回れている人々に平和が訪れる事を、願って止まない新年である。